みささぎ
奈良大学図書館報
第15号
2012. 11

「府県写真帖」の誘（いざな）う近代日本

文学部地理学科 教授　三　木　理　史

世界的に古写真への注目が高まっている。それを実感したのは、本学に赴任して初めての学科海外研修旅行を引率し、メキシコの地方都市メリダを訪れた20年前のことであった。街中の書店で買い求めたメリダの古写真集はいまも書架にある。

それ以来、訪問国は現在までに12ヶ国におよぶはずだが、古写真を利用した写真集や絵はがきを見かけなかった国はないように思う。そして、日本もご他聞にもれずである。ところが、その多くには被写体に関する簡単なキャプションはあっても、その写真集や絵はがきがなぜ作られたのか、さらにはなぜ写真が撮影されたのか、どのように撮影したのかが、わかるような解説はほとんどない。資料を研究に活用しようと思えば、広義の資料批判にあたる吟味が不可欠である。残念ながら近年古写真は、幅広い人気や支持を得る一方で、そうした記録資料（アーカイブ）としての研究が手薄であることに気付いた。

そのようなころ、近代日本の歴史地理学の研究者を中心にした、画像資料の共同研究への勧誘が舞い込んできた。そして、その研究会で申請した科学研究費が２年目にして採択されたのは2003年のことであった。当初、私に与えられた研究課題は、「大正広重」として知られる吉田初三郎の鉄道や都市に関する鳥瞰図の研究であった。それが、どのような契機で写真帖の研究に変化したのであったか、もはや記憶にはない。

しかし、前述のような以前からの古写真への関心が底流にあったことは相違ない。そして、まだサービス開始間もなかったNDL-OPACやWebcatなどを使って全国の図書館の所蔵情報を検索する一方、古書カタログや「日本の古本屋」サイトを使って古書市場に出回る写真帖探しもはじめた。

着手してみると、写真帖研究は奥深く、すっかりハマってしまった。それを１～２年つづけるうちに生じてきた関心の１つが、1900～10年代に集中する全国の府県庁が公式刊行した写真帖の研究であった。筆者は、のちにそれらを「府県写真帖」とよぶことになった。当時、本学図書館も、すでに『奈良県名勝写真帖』（1910年）と『大和名勝写真帖』（1914年）という奈良県庁刊行の写真帖を所蔵していた。

折しも国立国会図書館をはじめ、全国の公共図書館や大学図書館でインターネットによる蔵書検索システム（OPAC）の整備が進みはじめた。そこで、それらを利用して検索し、北は北海道から南は鹿児島県まで、科学研究費による調査出張は

1900～10年代に奈良県庁の刊行した写真帖

1910年代の大阪駅構内　　出所：『大阪府写真帖』

明治～大正期の府県写真帖（筆者実見の刊行帖のみ）

番号	書名	発行者	発行年月
1	東宮殿下行啓記念　明治四十四年	北海道庁	1911.7.18
2-a	東宮行啓記念写真帖	青森県庁	1909.9.18
2-b	青森県写真帖	青森県	1915.10.15
3-a	東宮行啓記念写真帖	巖手県奉迎会	1908.9.28
3-b	東宮行啓記念写真帖	巖手県	1918.10.1
4-a	東宮行啓紀念宮城県写真帖	宮城県	1908.10.4
4-b	松嶋写真帖	宮城県庁	1913.9.23
4-c	松島写真帖	宮城県庁	1923.3.20
5	東宮行啓記念写真帖	秋田県庁	1908.9.18
6-a	山形県名勝誌	山形県庁	1908.9.13
6-b	山形縣寫眞帖	山形県庁	1909.8.15
7-a	福島県写真帖	福島県庁	1908.9.7
7-b	福島県写真帖	福島県	1916.7.9
7-c	福島県写真帖	福島県庁	1924.8.
8	特別大演習記念写真帖	茨城県庁	1907.11.14
9	栃木県特別大演習紀念写真帖	山縣源吾	1910.10.30
10-a	埼玉県写真帖　上・下	不明	不明
10-b	埼玉県写真帖	埼玉県	1912.11.13
10-b'	埼玉県写真帖	埼玉県	1912.11.13
10-b	埼玉県写真帖	埼玉県庁	1921.3.30
11	神奈川県写真帖	神奈川県	1913.10.10
12-a	富山県写真帖	富山県	1909.9.29
12-b	富山県写真帖	富山県主催一府八県連合共進会富山県協賛会	1913.9.15
13-a	石川県写真帖／兼六園写真帖	石川県	1909.9.20
13-b	石川県写真帖	石川県庁	1909.9.15
13-c	石川県写真帖	石川県	1924.11.3
14	冨士と御嶽	山梨県	1925.10.5
15	一府十県連合共進会記念写真帖	長野県協賛会	1908.9.20
16	東宮行啓記念岐阜県写真帖	岐阜県庁	1909.9.10
17	静岡県写真帖	静岡県庁	1921.11.10
18-a	愛知県写真帖	第十回関西府県連合共進会愛知県協賛会	1910.3.15
18-b	愛知県写真帖	愛知県	1913.11.11
18	三重県写真帖	三重県	1910.11.10
19-a	滋賀県写真帖	滋賀県	1910.10.3
19-b	滋賀県写真帖	滋賀県	1910.10.3
19-c	滋賀県写真帖	日本赤十字社滋賀支部	1910.10.5
19-d	滋賀県写真帖	滋賀県	1915.11.5
20	京都府写真帖	京都府庁	1908.11.15
21	大阪府写真帖	大阪府	1914.11.5
22	兵庫県写真帖	兵庫県	1929.6.7
23-a	奈良県名勝写真帖	奈良県	1910.11.26
23-b	大和名勝写真帖	奈良県	1915.11.10
24	和歌山県名勝地写真帖	和歌山県	1922.12.1
25-a	島根県写真帖	藤本充安＊	1907.5.15
25-b	島根県写真帖	島根県蔵版	1924.3.30
26	岡山県案内写真帖	岡山県	記載なし
27-a	記念写真帖広島県物産共進会	広島県物産共進会協賛会	1915.6.25
27-b	廣嶋県写真帖	広島県庁	1926.5.20
28-a	東宮行啓記念写真帖	田山宗堯	1908.4.14
28-b	徳島県写真帖	徳島県庁	1910.6.10
28-c	東宮殿下行啓記念	徳島県	1922.11.28
29	皇太子殿下行啓記念写真帖	愛媛県	1922.11.
30	東宮殿下行啓記念写真帖	高知県	1922.11.23
31	明治四十四年　陸軍特別大演習記念	福岡県	1911.11.10
32	佐賀県写真帖	佐賀県	1911.11.11
33-a	大分県写真帖	大分県	1907.10.21
33-b	大分県写真帖	大分県	1920.11.1
34-a	宮崎県写真帖／宮崎県諸県森林写真帖	宮崎県	1907.10.31/10.15
34-b	宮崎県写真帖	宮崎県	1916.10.25
34-c	宮崎県写真帖	宮崎県	1920.3.25
35-a	鹿児島県写真帖	行啓事務総務部長・三宅源之助	1907.10.15
35-b	東宮殿下行啓記念	鹿児島県	1920.3.26
35-c	写真帖	鹿児島県	1925.4.
36	台湾写真帖	台湾総督府官房文書課	1908.10.10
37-a	日韓併合記念大日本帝国朝鮮写真帖	元統監府御編纂	1910.9.13
37-b	写真帖　朝鮮	朝鮮総督府蔵版	1921.10.15

注：印刷・発行年月で日付のないものは原典奥付に記載なし。22は対象外の時期の刊行だが、例外として収録した。網掛けは奈良大学図書館に所蔵のないもの。

もちろん、時には学生巡検の引率途中で、また時には学会出張のついでに、「府県写真帖」を求めての図書館行脚をはじめた。その成果がつぎの一覧表である。一方、科学研究費のおかげで資金的に恵まれていたため、古書での現物購入も積極的に進めることができた。その単価は１万円前後くらいで比較的安価に購入することができた。

当時は、「絵はがき」や「鳥瞰図」に比べて「写真帖」に注目するコレクターがまだ少なかったのか、おかげで全国の「府県写真帖」が意外に

珍しい木箱（上部）入りの『三重県写真帖』

手軽に入手でき、全国のかなりの「府県写真帖」が本学図書館に揃うことになった。個人的には、全国から学生の集まってくる大学の図書館として、それなりに意味があったかと思っている。しかし、何ごとも80％まで網羅するのは容易だが、残りの20％の達成にはその数倍の年月や労力を必要とする。「府県写真帖」の収集もその例外ではなく、古書サイトやカタログではめったに見かけないものや、もちろん抽選に漏れて買いそびれたものもあった。あるいは１点で10万円近くするため、いくら研究費があっても購入を躊躇したものもある。また、共同研究の終了後も、古書市場で見かけた場合には私の個人研究費などを使用し、現在も収集を細々と継続している。

さて、一覧表の発行年月を見ると、大半が1900年代末から10年代初頭にかけて発行されていることにお気づきになるであろう。それは、これらの写真帖が嘉仁皇太子（のちの大正天皇）の全国行啓に伴なって編さんされたためである。ひ弱な印象の大正天皇が、実は皇太子時代に精力的に全国を行啓していたという事実は、最近になって政治史家の原武史氏（明治学院大学）らによって明らかにされてきた（原『可視化された帝国』みすず書房，2001年ほか）。そうした精力的な全国行啓は、当初皇太子自身の地理・歴史の実地学習のた

『三重県写真帖』の木箱裏書き

めに行われていたという。

しかし、その行啓は、折しも次第に公務多忙化してきた父の睦仁天皇（のちの明治天皇）の地方視察を代行する役割に転じてきた。そして、その行啓時には各府県庁舎を訪問し、そこで府県知事から「治績報告」として地方経営状況の説明があった。「府県写真帖」とは治績報告のための資料の１つなのである。

そもそも視察を目的とした行幸啓時の編さん資料に、なぜその地域の風景を写した写真帖を加える必要があったのか。1900年代末から10年代初頭といえば、1906～07年に「鉄道国有化」が実施され、ようやく全国的に鉄道網が整備された時期に相当する。しかし、それはあくまで幹線筋で、地方末端には軽便鉄道さえなく、悪路を馬車や人力車で何時間も走る必要があった。そうした悪路の場所に皇太子を行啓させるわけにはゆかないし、それにも増して各府県を隅々まで視察するには多大な時間を要したであろう。なぜなら自動車のような機動力ある末端交通機関がなかったからである。そのため自動車使用の本格化した1920年代に入ると、「府県写真帖」を編さんする府県は激減することになった。筆者は、「府県写真帖」の刊行背景にそうした交通の発展過程を見る。

さて、こうして収集してきた「写真帖」について、筆者は科学研究費の成果報告として刊行された中西僚太郎・関戸明子編『近代日本の視覚的経験』（ナカニシヤ出版，2008年）に「地誌と写真帖」を寄稿し、また単著として拙著『世界を見せた明治の写真帖』（叢書・地球発見10）（ナカニシヤ出版，2007年）をまとめたりした。特に「府県写真帖」については、学術論文として拙稿「明治・大正期における府県写真帖の成立」（地方史研究協議会『地方史研究』第58巻第３号，2008年）を発表する機会も得た。また、授業では、地理学科の「地理学特殊講義」で『世界を見せた明治の写真帖』をテキストに、本学図書館所蔵のコレクションを回覧してもらいながら講義をしたこともある。特に筆者のこれまでの研究では、成果を「展示」するという機会はまずなかったが、写真帖については2007年春に本学図書館で企画展「府県写真帖の世界」を開催する機会を得た。当時のゼミ生に手伝ってもらって、展示や資料の準備をしたのも懐かしい。

さらに2011年秋には国立歴史民俗博物館の企画展示「風景の記録―写真資料を考える―」に参加を求められ、本学図書館からも写真帖数点を借り出し、展示した。珍しい木箱入りで、その裏書きに発行経緯の綴られた『三重県写真帖』もその１つに選んだ。

その展示候補の選定作業中に歴博のスタッフが本学図書館書庫から『奈良写真集』と題した和装の写真貼込帖を見つけ出してきた。図書館で調べてもらうと、『大和日報』で文芸記者をされていた北村信昭氏から、浅田隆教授（現名誉教授）を介して寄贈されたものの１つという。早速、内容を見てみると、1910年に県の刊行した『奈良県名勝写真帖』と共通する画像が多く、そのナマ写真を多数含んでいた。

すなわち、『奈良写真集』は、陸軍特別大演習で奈良県を行幸した睦仁天皇の天覧用に編さんした写真帖の控帖ではないかというのが、現在の筆者の見解である。それにしても普段から本学図書館書庫をたびたび利用し、また全国に写真帖調査に出かけながら、その存在に気付かないとは迂闊で、まさに「灯台下暗し」を実感した。そして、企画展では、『奈良県名勝写真帖』と『奈良写真集』を並べて展示してもらい、図録『風景の記録―写真資料を考える―』の解題で、その旨に言及したのはいうまでもない。刊行写真帖と、捧呈控帖の双方が揃って残存している奈良県帖の類例は、一覧表№９の栃木県くらいしか知らないので、全国的にも珍しい例であろう。

『奈良名勝写真帖』の東大寺大仏殿

奈良大学図書館所蔵『奈良写真集』の東大寺大仏殿

幸せな午後

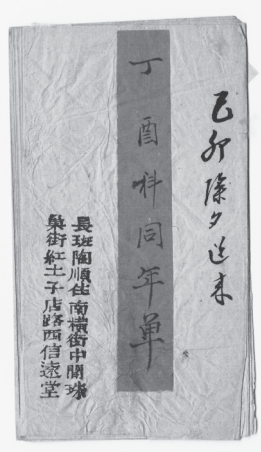
文学部史学科 教授
図書館長　森　田　憲　司

いつごろ手に入れたのか忘れたが、「丁酉科同年単」という手書きの資料を持っている。

北京在住の官僚文人達の住所録なのだが、内容から考えて、丁酉が光緒23年（1997）のことだということはわかるのだけど、何のために作られたものかは、わからないままでいる。この光緒23年の夏には、翌年実施される科挙の北京（順天府）での地方試験である、「順天郷試」がおこなわれていたはずで、おそらくはそれと関係があるのだろうが。

夏休みのある日、これをながめていて、名前の出てくる繆荃孫（1844－1919）の資料が、我が家にあることにふと気がついた。

繆荃孫は清朝末期から中華民国時代の大蔵書家、書誌学者で、私にとっては、彼の収集した金石の拓本が、北京図書館（今の中国国家図書館）の拓本コレクションの核となっていて、それが『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編』という形で公刊され、研究の大きな助けとなってくれている。



丁酉科同年単

「藝風老人」と名乗った繆荃孫の日記や年譜を、自宅の書庫に持っていたはずなのだ。年譜の方は『藝風老人年譜』、日記は『藝風老人日記』という。年譜は、台湾で刊行された『近代中国史料叢刊』に収められていて、奈良大学図書館にもある。

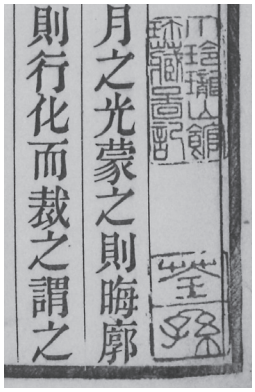
しかし、索引も含めて全10冊の『藝風老人日記』は、北京大学出版社が繆荃孫自筆の日記を影印して、1986年に出版したものだが、ciNii で検索しても所蔵機関は多くない。

年譜には、この年の條に「八月舉行丁酉正科購書甚多（八月、丁酉正科を舉行し、書を購うこと甚だ多し）」と書かれて、わずかながら言及されているのだが、日記の方には、この年の部分に「丁酉正科」に直接つながりそうな記事を見つけることはできなかった。謎は続く。もっとも、私の関心は「丁酉正科」そのものではなく、ここに書かれている官僚たちの住所なのだけれど。

それにしても、今から約30年前に新刊目録で目にして、有名な蔵書家の日記だから、きっと役にたつだろうし、読むだけでも面白いのではと購入した。しかし、買った当初は開いたはずだが、その後は縁がなく、そのまま書庫に眠ったままだった。本格的に目を通したのは、たぶんこれがはじめてだ。

いつか役に立つだろうと思って買っておいた書物に、めぐりめぐって30年後に利用の機会がきた。結果としては役に立つ記事は見つけられなかったが、本を集めるというのはこういうことなのだと、暑い夏の午後にベッドに寝ころがって頁をめくりながら、幸せな一日だった。

図書館も、いま要る本、使われる本とともに、いつか誰かがきっと必要とする基本的な図書、そういうものに目を向けて集書していかねばと思った次第。



小野川文庫「湛然居士集」に捺された繆荃孫の印

後　記

奈良大学図書館報第15号をお届けいたします。前回６月に発刊し、平成24年度に入りはや２報目でございます。

今回、原稿を執筆いただきました三木先生、森田先生には心よりお礼申しあげます。

図書館企画展示の次回は、香港の新聞『大公報』とその周辺Ⅱ【仮称】として12月中旬頃を予定しております。乞うご期待。それを受けまして、次回、図書館報第16号は、平成25年１月の発刊を予定しております。（編集担当）

発行：平成24年11月１日
編集：奈良大学図書館　奈良市山陵町１５００